

赤十字NEWS 9

SEPTEMBER.2024.#1012

Japanese Red Cross Society NEWS

9月は「防災・減災月間」!

特集 | ▶ P.2

“小さな安全隊長”の防災セミナー体験 子どもだって、 大切な人を守りたい

佐賀県の認定こども園で行われた
幼児向け防災セミナーの様様

TOPICS

ACTION! 防災・減災プロジェクト 一命のために今うごこー
特設サイト「SAVE365 Magazine」で
めざせ! 防災チャンピオン!

勤務地や学校で「もしも」に備え、皆で考える
防災グループを作ろう! P.4-5

連載

未来を守る防災ゼミナール P.4
献血ハートフルストーリー P.5

AREA NEWS

[群馬] 学び合う赤十字防災ボランティア
能登半島地震の活動報告も

[新潟] 新潟地方気象台と協働
親子で防災セミナー

[静岡] トライアスロン大会に出展
AED体験ブース大盛況 /他 P.6-7

WORLD NEWS

40年超のネパール支援、完結。新たな連携へ
..... P.8

PRESENT!!
「日赤の
車載用防災セット」

プレゼント!
10名様
詳しくは
P.7をCheck! ▶



SPECIAL FEATURE

特集

“小さな安全隊長”の防災セミナー*体験 子どもだって、大切な人を守りたい

日赤は、いつ起こるかわからない大規模災害に備えて、さまざまな人を対象に防災セミナーを行っています。そのセミナーで講師として活躍するのが、赤十字防災ボランティアです。今回は、佐賀県で実施された幼児向けの防災セミナーに密着。子どもたちが地震発生時の身の回りに潜む危険に気づき、自分自身と大切な人を守る方法を学んでいく姿を追いました。



防災教材のイラストを見ながら、身の回りの「危険な場所」を次々と見つけ、発言する子どもたち。自信とやる気が刺激され、目を輝かせて意見を話し合う。

このセミナーの様子、子どもたちの声をまとめた動画はコチラから(9月上旬に公開予定)



*佐賀県支部では赤十字防災ボランティアが行う防災学習を「防災セミナー」と称しています

幼い子どもたちにだってできる！自分の命を守ること×大好きな人を守ること



今回の防災セミナーは幼稚園・保育所向け防災教材「ぼうさいまちがいさがし きけんはっけん!」をベースに、大渡さんオリジナルの「小さな安全隊長バッジ」や「ハートラ紙人形」も使用して実施されました。



「きけんはっけん!」について詳しくはコチラ



私が行っている幼児向けの防災セミナーでは、子どもたちを「安全隊長」に任命して、身の回りの危険な場所や物を考え、地震が起きたときに取るべき行動を実践してもらっています。このアイデアは、6年前の幼児向け防災セミナーがきっかけで生まれました。3歳くらいの子供たちは日赤の赤いユニホームを着た私に緊張した様子だったので、どうにか楽しませようと、とっさに出たのが「みんなを安全隊長に任命します!」という言葉。すると、その一言で、子どもたちの表情がやる気に満ちたものになりました。さらに、「安全隊長は、ハートラちゃんに危険なところを報告する」と手作りのハートラちゃんを見せたら、保護者にくっついてモジモジしていた子も、ピンと背筋を伸ばして、どんどん前に出て発言をするようになったのです。それまで私は、幼児は大人が守るもので、子どもたちにも「守りたい」気持ちがあると、考えたこともありませんでした。でもその瞬間に、**どんなに幼くても「守りたい」思いがあり、行動に移すことができるのだと気づかされたのです。それ以来、幼児向けセミナーでは「みんなが**

安全隊長!の発信を続けています。

今回のセミナーでは「ピアノは重いから気をつけないと」「カブトムシの棚が危なそう」など、“危険”に気づいてみんなに伝えてくれたことがうれしかったです。自分の身を守ることはもちろんですが、「誰かのために」という気持ちも強く、地震が起きたらどうする?と聞くこと「家族みんなを守りたい」と口をそろえる様子に感動しました。安全隊長の証しであるお手製のハートラちゃんバッジを子どもたちにプレゼントしたので、それを家に持ち帰ったら家族にも今日学んだことを話して、災害への備えの意識と、子どもたちの守りたい思いが伝わることを期待しています。

日赤佐賀県支部 赤十字防災ボランティア 大渡 千恵さん

赤十字ボランティア歴約15年。本職である保育士の経験を生かし、赤十字幼児安全法や赤十字水上安全法の指導員として、地域の講習活動に取り組む。

SCENE 1 地震が起きたら、どうなるの?



まだ大きな地震を経験したことのない園児たちのために、手作りの家の模型をグラグラと揺すって地震の衝撃を伝える大渡さん。子どもたちは、家具が倒れ、模型の箱から飛び出す様子に声を上げて驚く

SCENE 2 この絵の中で危ないのはだれ? みんなで考えてみよう



イラストを使って、地震のときに危ない場所や行動について、みんなで意見を出し合う。「ここはガラスが落ちてくる」「この棚、タイヤがついているから動いちゃう!」と次々に危険を発見する子どもたち

SCENE 3 みんなを安全隊長に任命します! ハートラちゃんバッジ進呈



安全隊長の証しとして、大渡さん手作りのハートラちゃんバッジを受け取る園児たち。うれしそうに友達同士で見せあったり、満足げな顔でピンと背筋を伸ばしたり、反応もさまざま

園児たちも思わず真剣に。地震が来たときの練習をしよう!

SCENE 4 教室の中の危ないところをチェック



小さな安全隊長たちと教室の中の危険な場所をチェック。続けて、「地震だよー」の掛け声を合図に、頭を守る“ダンゴムシポーズ”をしたり、机の下に身をかがめ、机が地震の揺れで動かないように両手で脚をつかむ“おさるさんポーズ”を取るなど、自分の身を守り、仲間を危険から助けるための実践練習

SCENE 5 地震が来たら自分の身を守ること、大好きな人を守ることができるかな?



セミナーの最後、大渡さんの「安全隊長として、今日のお話を他のクラスのお友達や家族にも教えてあげられるかな?」の呼びかけに、元気な声で「はい!」と答える園児たち

はらだらくん
パパもママも、4歳の弟もみんな大好き。地震が来たら家族全員をぼうが守りたい!

やまぐちひまりちゃん
地震が来たら、3歳の弟を連れて逃げたい。ママとパパもみんな助けたい。

もんだりあちゃん
地震が来たら、小学校2年生のお兄ちゃんを助けたい!だって、大好きだから。

えぐちたかひくん
教室の天井にある扇風機が落ちてきたら危ないと思った。下にお友達がいいたら助けてあげたい。

「大切な人を守りたい」子どもたちの中にも“博愛”はある



園長 五反田 康子さん

「防災セミナー」を実施した園: 幼保連携型認定こども園 学校法人川副学園 博愛の里こども園



担任 大渡 千恵 先生

当園は0歳から6歳のお子さんを預かり、保育と教育を行う認定こども園です。園のある佐賀市川副町は、日本赤十字社を創設した佐野常民先生の生誕の地。地域全体に「博愛」の心が根付いていて、私たちも青少年赤十字加盟園としてその理念を伝え、園児たちの口からも自然と「はくあい」という言葉が出るほど浸透しています。日赤の防災セミナーは6年前に初めて取り入れました。園では月に一度、避難訓練やオリジナルの資料で学習していますが、日赤の防災セミナーは子どもが自分の頭と体を使って考える内容だと聞き、講師の派遣を依頼。セミナーを受けている子どもたちの様子を見て、受け身で聞いている姿とは違い、みんな積極的に発言をしている姿に驚きました。特に安全隊長に任命されてバッジをつけてもらった途端に、隊長になりきって集中している。普段から「大切な命だから、自分の命は自分で守らなきゃ」と教えていますが、日常の中の危険な場所に「気づく」ことで、「自分で考え、実行できる」学びになったと感じています。

普段、避難訓練を通して子どもたちと防災について一緒に考える機会はありませんが、大渡さんの防災セミナーは、いつもより子どもたちがいきいきとして、楽しんで参加していました。「きけんはっけん!」のイラストも分かりやすく子ども自身が危険な場所に気づける教材ですし、自分たちの教室の「地震が起きたら危ない場所」を実際に探す、体を動かしての活動なので、始める前はちょっと長いかなと思った40分間のセミナーがあっという間でした。今回のセミナーに参加した年長児たちは「自分たちが園のリーダー」という意識を持ち、園生活で年下の子の面倒を見ている子たちなので、みんなの安全を守る「安全隊長」に任命されてバッジを渡されたときは本当にうれしそうでした。日頃から年下のお友達とペアになって活動したり、給食の配膳を手伝ったりする中で相手を思いやる気持ちを育てていますが、この防災セミナーの経験によって、**災害が起きた際には自分自身の身を守ることに加え、周りを助ける意識も高められたと感じています。**

T P I C S

1 TOPICS

ACTION! 防災・減災プロジェクト —命のために今うごく— 特設サイト「SAVE365 Magazine」で めざせ! 防災チャンピオン!



■モバイルサイト



防災意識を高め、万一のときに命を救う行動につなげる啓発プロジェクト「ACTION! 防災・減災 一命のために今うごく」。その特設サイト「SAVE365 Magazine」では、新たに雑誌「anan」とのタイアップ企画として災害時をリアルに想定した「ローリングストック」のはじめ方ガイドや新コンテンツ「めざせ! 防

災チャンピオン! 防災3択クイズ」を公開。防災に関する8問のクイズに答えれば、あなたの防災レベルが「防災チャンピオン」「なかなかの防災ツウ」「防災五合目」「かけだし防災訓練生」と、4つのタイプで表示されます。ぜひチャレンジして、防災レベルを上げていきましょう。

雑誌「anan」とのタイアップ企画では 非常食レシピも紹介

ローリングストックとして備蓄の缶詰や保存食を活用した「非常食レシピ」を掲載。ガスや水道などのライフラインが使えない状況を想定し、料理初心者でも簡単に作れ、栄養バランスも良いレシピを紹介しています。

非常食レシピ

栄養素をそのままに!
「サバ缶とキノコの炊き込みごはん」
詳しい材料やレシピは特設サイトをチェック!



このレシピを考えたのは...
管理栄養士・防災士 中下 涼さん
日本赤十字社 広島県支部
健康・栄養赤十字奉仕団委員長



広島県支部の健康・栄養赤十字奉仕団は、被災者の健康の維持を目的として広島県内の栄養士・管理栄養士を中心に結成。被災地での栄養相談・健康教室などの開催、栄養バランスを考えた炊き出しなどを行う。

防災3択クイズ、
非常食レシピの詳細内容は
特設サイトをチェック!



未来を守る 防災ゼミナール

..... 今回のテーマ

被災した瞬間から始まる情報支援

災害救護研究所
情報企画連携室 客員研究員
市川 学さん
芝浦工業大学
システム理工学部 教授

人々の生活にはデジタル技術が浸透していますが、被災地支援のデジタル技術の活用は、まだ始まったばかり。保健医療支援の分野では今年1月の能登半島地震で初めて、情報収集をデジタル中心に行うことが実現しました。

私は、社会にある課題をデジタル技術で解決していく研究を行っています。その延長として、災害時に保健・医療・福祉活動を行うための情報支援に取り組んでいて、日赤の救護班やDMAT(災害派遣医療チーム)、DHEAT(*)などの活動に生かされます。

被災地の外から来た救護班は、避難所の場所やそこに行くためのルート、エリアごとの避難者数、どの避難所にどのような被災者(妊産婦や要介護者など)がいるかという情報を把握しなければ、適切な支援活動ができません。また、通行できない道や、停

電・断水・通信の遮断などの状況が、一目で分かるようにマップに表示されれば、より早くて確実に活動を展開できるようになります。実は、災害が起きて派遣される救護班の活動は、こういった事前情報の有無に左右されます。医師・看護師などの医療チームの時間は人を救うために使われるべきで、何十時間もかけて避難所を回って情報を得なければならないのは、人的資源や時間のロスです。私は約10年にわたり研究を続け、今年1月の能登半島地震では、石川県の保健福祉医療調整本部の情報収集をデジタル面でサポートしました。さまざまな省庁や団体が別々のシステムを使うので、情報の一本化などの課題はありますが、数年前まで紙に書いた情報をFAXで集め、人が情報を整理していたことを思えば格段の進歩です。

*DHEAT(ディーヒート)=保健師などが中心となる災害時健康危機管理支援チーム

日赤の災害救護研究所
の専門家の視点から、災害時に必要な知識や今から始められる防災など、役立つ情報を発信します。

災害救護研究所とは?
日本赤十字看護大学付属の研究機関として2021年に発足。災害時の救護活動を通して得た知見を学術的に分析・集約し、被災者の苦痛の予防・軽減を目的とした研究所。

みなさんに知っていただきたいのは、災害発生後の情報の収集と分析が、早くて確実な支援につながる、ということ。今後は、被災者自身がデジタルで情報収集に協力する仕組みも大切になると考えます。それは、被災した瞬間から始まる「全員参加型」の支援や復興です。一人一人がそのことを理解し、万一のときに「情報集約のために何ができるか」を考えれば、地域を動かすきっかけとなっていきます。全員参加で、皆が助かるために、情報収集や活用の方法を考え、協力し合っていきましょう。



2
TOPICS勤務先や学校で「もしも」に備え、皆で考える
防災グループを作ろう!かねこ なみ
金子 那海さん

災害の備えとして、自宅に防災グッズや備蓄品を用意されている方は多いと思います。では、勤務先や学校にいるときの備えはどうでしょう?自宅以外の長く過ごす場所で地震や火災が発生した際の消火設備の有無や使用方法、避難ルートなどは、把握できていますでしょうか。今回は、日本赤十字看護大学が2020年に埼玉県で開設した「さいたま看護学部」の一期生として、防災グループの立ち上げに参加した金子那海さんの体験と気づきを紹介します。

「お客さん」ではない、
自分たちで企画する防災訓練

「入学して間もなく、防災委員の先生から『本校で防災訓練を実施したり、防災を啓発する学生の部会を作りませんか?』と提案があり、同学部の一期生10人で、学生防災部会を立ち上げました。私たちが入学した2020～2021年はコロナ禍で、オンライン講義が中心。演習や実習が必須の看護大学でも学生が一堂に集まることが難しい状況だったので、防災訓練の動画を自分たちで撮影し、「オンライン防災訓練」を実施、動画を見た後に班ごとに話し合うワークショップも企画しました。運営側として関わることで自分のいる施設の防災設備がどうなっていて、どう使うかを知ることができ、「想定外」のことを熟考する機会になりました。また、2年目は大学から予算を出してもらい、帰宅困難となって校内で一時避難する場合に必要な備蓄品を検討し、買

いそえることも。私も、小中高校と避難訓練には参加してきましたが、先生の指示に従うだけで、こんなに主体的に避難を考えたことはありませんでした。今年3月に大学を卒業しましたが、万一のときにどう対応したらいいかをその場所にいる当事者目線で真剣に考えられたのはよい経験でした」(金子さん談)



金子さんたちは昨年、リアルの防災訓練も企画

活動事例

防災訓練動画を
学生目線で制作

大学の協力を得て撮影・編集。授業中に大きな地震があり、校内で火災も発生という想定で、学生目線の対処策を映像化した。屋外の一時避難所にどのルートで避難するか、また、地震により出火した場合の防災設備の使用方法などを、学生メンバーが熟演。



CGで炎や消火剤の白い煙などリアルに演出



更衣室で逃げ遅れた学生を発見

実際に起こりそうなアクシデントも想定



教員の指示に従い

避難開始から完了するまでを全て見せる

「学生防災部会」の
活動事例はコチラ



献血ハートフルストーリー vol.9

このコーナーでは、血液事業に携わる日赤職員、ボランティアさん、献血協力者などの人たちが、日々どのような思いで血液事業に取り組んでいるのかを紹介していきます。

温かい思いをつなぐ、北の大地の献血バス



今月のひと

profile

北海道赤十字血液センター
釧路事業所 看護師
すずき りえ
鈴木 理絵さん

私は北海道の東部を回る献血バスの看護師として、採血や献血者のケアを行っています。今年で日赤に入社して12年目。以前は総合病院に勤務し、輸血により患者さんの命が救われ、回復していく姿を目の当たりにしていました。

北海道での担当エリアは広範囲に及び、事業所のある釧路から150km離れた羅臼町へ移動するこ

とや、他の町でも献血会場を設けながら、2、3泊の行程で向かうこともあります。会場に来られる方は長年協力を続けてくださる「おなじみ」の顔ぶれで、「また会いに来たよ」とバスに乗りこんでこられると、こちらも思わず笑顔になってお出迎え。最近は、献血者の高齢化で、最後の献血に来たという方も増えていますね。つい先日、今回が最後の献血という牧場経営者の方と、採血をしながら12年間の思い出話に花が咲き、牧場のスタッフをたくさん連れてきてくださいましたね、とお礼を伝えると「よく覚えているね～」と驚かれ、お互いに目頭が熱くなる一幕も。その方が去り際に、献血バスに向かって深々とお辞儀をされた姿は、きっと忘れないでしょう。

献血に長く携わり、同じ町に繰り返し訪れていると、初めての献血で緊張していた高校生が就職して釧路を離れ、その後帰郷して、また顔を出してくれるようになったり、子どもが献血できる年齢

になったと親子で来てくださったり。十代のお嬢さんが一緒に来た親御さんに「献血がなければ親と出かけないよ」と話すのを聞いて、献血が親子の絆にもなっているとほほ笑ましくなりました。

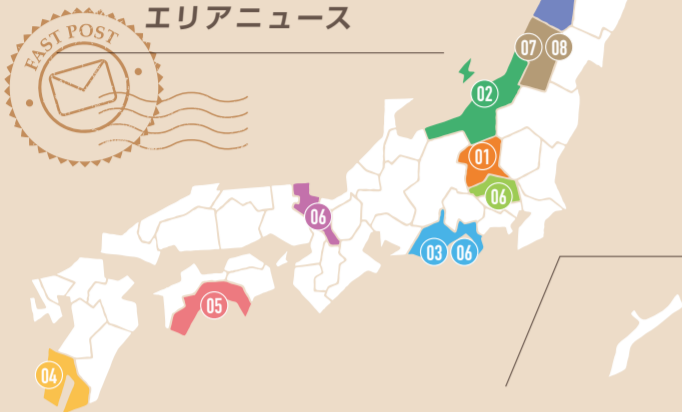
献血の仕事に意義を感じて病院から転職しましたが、仕事の枠を超えた人と人のつながりを日々実感し、献血に協力して下さっている方々から逆にエネルギーをもらっている気がします。



献血中

Area News

エリアニュース



全国各地、あなたの生活のすぐそばで日本赤十字社の活動は行われています。



新潟地方気象台と協働 親子で防災セミナー



今年、新潟地震から60年、新潟県中越地震から20年と、大きな自然災害の節目が重なる年。これを機に災害の経験・記憶を次世代へ継承することを目的として、7月28日に「親子で学ぶ 夏休み防災イベント*」を日赤新潟県支部で開催しました。イベントでは日赤防災教育事業「おうちのケン」冒頭部分の地震のメカニズムや緊急地震速報について新潟地方気象台の担当者から説明。その後参加者は、風呂敷頭巾や風呂敷リュックなどの防災グッズ作りや、救護物資の積み下ろしなど、体を動かすメニューを次々と体験しました。参加した親子からは、「家に帰ってから家族で話し合い、災害に備えたい」などの感想が聞かれました。 *主催：新潟日報社



小学生に福祉・介護の啓発 「お年寄りは大変だなあ」



6月28日、日赤が運営する特別養護老人ホーム錦江園は、社協主催の「未来の福祉・介護担い手スタートアップ事業」の一環として、地元の平川小学校6年生14人の体験学習を受け入れました。小学生たちは、施設内の見学や職員・入居者との会話を楽しんだ後、「高齢者疑似体験」を行いました。高齢者の不自由さを疑似体験するゴーグルや手・足の重りを装着した児童たち。体験終了後、「高齢者の気持ち理解できた」「今後は大きい字でお手紙を書こう」「将来は介護の仕事に就きたい」などの声が寄せられました。今後も、若い世代に向けた福祉・介護の啓発に努めていきます。



学び合う赤十字防災ボランティア 能登半島地震の活動報告も



日赤群馬県支部では、6月19日に赤十字防災ボランティア集会を開催。災害時に連携を図る4奉仕団(無線、桐生市安全、飛行隊支援、接骨師)と個人ボランティア、計50人が参加しました。赤十字の防災ボランティアは災害発生時に日赤の活動に参加する個人登録のボランティアです。能登半島地震では、8人の個人ボランティアと3人の接骨師奉仕団員が群馬県から能登に向かいました。接骨師奉仕団による臨場感のある救護活動報告に参加者は熱心に耳を傾け、また、同時に開催した赤十字防災セミナーの「ひなんじょたいけん」も受講。一人一人が真剣に避難所で想定されることを疑似体験し、主体的に避難所の運営に協力していく姿勢の大切さを学びながら、連帯感を高めました。



トライアスロン大会に出展 AED体験ブース大盛況



日赤静岡県支部は、6月30日に開催された「レイクハマナ・トライアスロン大会 in村櫛2024」にAEDブースを出展。参加アスリートや大会ボランティアなど、100人ほどが来訪しました。参加者にはAEDに興味を持つ方が多く、救急法指導員に疑問点や心肺停止になった際の対応を積極的に質問する姿が見られました。その他、赤十字事業紹介パネルの掲示と共にハートラちゃん写真撮影をする機会を設け、好評を博しました。静岡県支部は一般社団法人静岡県トライアスロン協会とパートナーシップを締結し、令和7年度からはチャリティーエントリー*も計画しています。

*選手としてエントリーする大会の参加料に寄付金が含まれ、指定団体に寄付されるもの



治療奉仕団による 地域貢献活動 「一日赤十字」



日赤高知県支部では、「一日赤十字」と称し、高知県立盲学校の学生治療赤十字奉仕団の生徒と教員による奉仕活動を行っています。

今年、7月11日に2年ぶりの開催が実現しました。当日は地元の地域奉仕団が、会場準備、呼び込みや受け付け、物品の消毒などを行い、参加者が安心して施術を受けられる環境を整えました。無料のボディケアを受けた方からは、「疲れが和らいだ」との声が聞かれ、充実した活動となりました。昭和30年結成という長い伝統を持つ学生治療赤十字奉仕団は、今後も地域奉仕団と共に、地域住民への貢献活動を続けていく予定です。



水の事故を防ぐために 各地で赤十字水上安全法講習



①黄葉公園プールでは溺者の救助技術を訓練。②木津第二中学校の生徒による胸骨圧迫の練習。③さいたま市内のプールで行われたライフジャケット体験会。④静岡県支部の講習では陸からの救助法を指導

日赤京都府支部(①②)では、7月6日、宇治市の黄葉公園プールで水上安全法短期講習を実施、プール監督員、監視員など計37人が参加しました。日赤の指導員は「溺れている人は叫ぶことなく静かに沈んでいきます。事故を未然に防ぐための監視であることを意識し、気を抜くことなく泳者全員を見守ってください」と説明しました。また、7月11日には、市立木津第二中学校で救急法と水上安全法短期講習を実施。同校2年生全員と教職員、計143人が「自分たちが助ける」を合言葉に、午前中は体育館で

一次救命処置を、午後からはプールでの着衣泳をトレーニングしました。

埼玉県支部(③)では、7月13日と28日に、2カ所の屋外プールで「ライフジャケット体験会」を実施しました。今年は、川の流れをリアルに体感できるよう、流れるプールを使用。参加した親子からは、「ライフジャケットの重要性を理解できました。購入してから海に行きまじ」といった声が聞かれました。

静岡県支部(④)では、県内38校・約3000人の小中学生を対象に、着衣泳と水に入らないレスキューの講習会を実施。参加者は「自分が水に落ちたときや人を助けるときに何をすればいいかわかった」と語りました。



台湾フードバンク会員に 非常食作りを伝授



6月10日、米沢市・里山ビジョンハウスにて、高畠町赤十字奉仕団が台湾から来日した菜林フードバンク会員約30人に対し、耐熱性ポリ袋を用いた非常食作りの指導を行いました。近年、自然災害が多発している台湾でも、防災意識は高まっていますが、災害時の炊き出し活動には課題があるとのこと。菜林フードバンクが山形県のフードバンクおよび防災の取り組みに関心を寄せ、今回の来県と、炊き出し指導へとつながりました。非常食の指導には奉仕団の我妻由美子委員長があたり、奉仕団メンバーと一緒に、きのこご飯や蒸しパン、肉じゃがを作って食べ、台湾のメンバーからは「とてもおいしい」「実際に作ってみて参考になった」と大好評でした。



7月25日からの東北大雨災害 日本赤十字社の被災者支援活動



北日本に停滞した梅雨前線の影響で、東北地方の日本海側を中心に記録的な大雨となり、秋田県および山形県では、河川の氾濫による被害が発生しました。

秋田県支部においては、秋田赤十字病院から日赤災害医療コーディネーターを派遣し、避難所の状況確認を行い、保健・福祉・医療のニーズの把握につとめました。

山形県支部においては、救護物資(毛布60枚、緊急セット24セット、タオルケット50枚)を配布するとともに、ボランティアによる炊き出しなどを行いました。また、8月1日からはこころのケア班を派遣し、避難所を巡回するなど、被災者に寄り添った支援を実施しました。

受け付け中

「令和6年7月25日からの大雨災害義援金(秋田県、山形県)」

●受付期間:2024年12月27日(金)まで

※お寄せいただいた義援金は、全額を被災地の義援金配分委員会にお送りします

ご支援は
こちらから



PRESENT!!

日赤の車載用防災セット
非常用トイレ、長期保存水など車に常備しておきたい防災アイテム16点がこの1箱に!

10名様

オンラインショップは
こちら

日赤サービス
nisseki service Co.,Ltd.



プレゼント希望者は、以下の項目を明記のうえ、郵送・WEBでご応募ください。
①お名前 ②郵便番号・ご住所 ③電話番号 ④年齢 ⑤赤十字NEWS9月号手にされた場所(例/献血ルーム)

⑥9月号読者アンケートの回答

※ご応募いただいた個人情報はプレゼントの発送および弊社からのお知らせのみに利用いたします

(⑥9月号読者アンケート)質問項目

- [A] 日赤の「会員」ですか
ア.会員(年間2千円以上の寄付を継続している。但し、義援金を除く) イ.会員ではない
- [B] 赤十字について知っている活動はどれですか*※下記選択からA~ケの文字をご記載ください。複数選択可
ア.国内災害救護 イ.国際活動 ウ.赤十字病院 エ.看護師等の教育 オ.献血(血液事業) カ.救急法等の講習
キ.青少年赤十字 ク.赤十字ボランティア ケ.社会福祉
- [C] 今月号の赤十字NEWSをお読みになって、以前よりも赤十字活動全体についての理解が深まりましたか
ア.とても理解が深まった イ.ある程度理解が深まった ウ.すこし理解が深まった エ.以前と変わらない
- [D] 興味・関心を持った記事・企画はどれですか
ア.特集 イ.TOPICS ウ.防災セミナー
エ.献血ハートフルストーリー オ.エリアニュース
カ.プレゼント キ.ワールドニュース
- [E] 赤十字NEWSの適切な大きさは
ア.今のまま イ.A4サイズ ウ.小冊子(A5 148×210mm)サイズ
- [F] 赤十字NEWSの発行回数は何回がよいですか
ア.月に1回 イ.2か月に1回 ウ.3か月に1回 エ.半年に1回
- [G] 赤十字NEWSの記事をスマートフォンやパソコン(オンライン)で読みたいですか、
いままでどおり紙で読みたいですか
ア.オンライン イ.どちらかというオンライン
ウ.(オンラインと紙の)両方 エ.紙 オ.どちらかという紙
- [H] その他、赤十字NEWSに関するご意見、ご要望(任意)

郵送/〒105-8521東京都港区芝大門1-1-3
日本赤十字社 広報室 赤十字NEWS
9月号プレゼント係
WEB応募/下の二次元コードからご応募ください。

9月30日(月)必着

*当選者の発表はプレゼントの発送をもって代えさせていただきます

ご応募は
こちらから





ネパール連邦民主共和国ってどんなところ？

インドと中国の間に位置し、国土は北海道の約1.8倍、人口は約3055万人。ヒマラヤ山脈に代表されるように地形の起伏が激しく、国土の約8割が丘陵・山岳地帯であり、自然災害のリスクも多く抱えている。

40年超のネパール支援、完結。新たな連携へ

日赤はこれまで、飲料水の供給や衛生環境改善、防災事業など、さまざまな形でネパール赤十字社への支援を行ってきました。2015年4月に発生したネパール大地震以降は、急性期の緊急支援から復興支援まで5年以上継続。2021年からは集落の防災力と回復力強化を目指した事業を行い、2024年5月に完結しました。今回は日赤による40年以上にわたる支援の歴史を振り返ります。

1983年、海外たすけあいと共に スタートしたネパール支援事業

日赤とネパールの関わりは、古くは1965年にまでさかのぼります。当初は日赤職員ではない結核など伝染病の専門家の派遣を行っていました。その後、本格的な支援に乗り出したのは、1983年。このころ、国際赤十字が開発途上にある国々の農村開発や衛生・感染症問題に注力し始め、その中で日赤はNHKと協働する「海外たすけあい」キャンペーンをスタートさせました。ネパール支援は「NHK海外たすけあい」の寄付で実施された最初の開発協力の一つです。

この事業では、飲料水供給と衛生改善の課題に取り組みました。当時のネパールは、約6人に1人(約18%)の子どもの5歳まで生きられずに亡くなるほど、不衛生な飲料水と衛生知識の欠如による高い罹患率が問題視されていました。日赤はネパール赤十字社を通じて同国の18の郡で人々に安全な水を提供するために、地形の高低を利用した簡易水道や井戸などの整備を進めました。また、保健スタッフが女性向けに保健衛生教育を行ったり、家庭を訪問して食事の栄養バランスを指導したりと、草の根の活動で健康支援を行い、この活動は2003年まで続きました。現在では、5歳までの子どもの死亡率は2~3%にまで低下。20年間続いた日赤による支援も、保健衛生の土台作りの一端を担いました。



NHK海外たすけあいの寄付によって設置された井戸を喜ぶ村人たち

「住民の災害対応能力を 高めるために」 コミュニティ防災事業を支援

その後2012年には、ネパール・コミュニティ防災事業への支援を始めます。山や川の多いネパールでは、災害が発生すると支援が届きにくいと、住民が自ら災害に対処し、被害を最小限にとどめる力をつけることが重要です。3つの郡を回り、日本の消防団のように災害時には初動対応も行う自主防災組織の設立や住民への防災教育などの活動を約3年続けましたが、そんな矢先、2015年のネパール大地震が発生しました。マグニチュード7.8の地震は、当時の人口のおよそ20%、約560万人が被災するほどの甚大な被害をもたらしました。日赤は発災当日から医療チームを派遣し、その後2020年12月まで、住宅再建や給水衛生、生計支援など、幅広い分野で復興に向けたサポートを行いました。

大地震を経て より災害に強い地域づくりへ

2021年からは、新たに同国の中で特に災害リスクの高い3つの地域で、ネパール大地震の経験を踏まえた「コミュニティ防災強化事業」への支援に取り組みました。公共のインフラも十分に整備されていない地域で、ネパール赤十字社は官民一体となって



2015年のネパール大地震で被災者のけがの処置をする日赤の医療チーム

災害に備えるため、自治体と協定を締結。新しい支援地でも「自主防災組織」を結成して、救急法や消火訓練に取り組むなど、防災力と回復力の強化に励み、日赤もそれを支援しました。新型コロナウイルスの感染拡大による活動休止など紆余曲折ありましたが、今年5月、この支援事業も区切りを迎えました。日赤のネパール代表部を閉鎖するため、現地に赴いた国際部の辻田岳さんは、ネパール赤十字社のスタッフとのやり取りを振り返ってこう語ります。

「ネパールを離れる際に現地スタッフにかけられた、『日赤のおかげでネパール赤十字社がある』という言葉は忘れられません。この40年以上に及ぶ活動によって、ネパールの人々に“赤十字は身近な存在、頼りになる組織”という意識が定着しました。これからは、ネパール赤十字社が自らの力で事業を推し進めていくフェーズです。大きな懸念の一つである活動資金確保においても、意識の高いボランティアやスタッフが地域行政に働きかけ助成金の協力を得るなど、自分たちの力で歩み出しています。これからも、ネパールの状況を注視しながら、必要に応じて支援ができる体制をとりたいと思います」

支援は区切りを迎えましたが40年以上の深い関わりの中で強い絆を育み、共に成長してきた「赤十字の仲間」としての連携は、これからも続いていきます。



土砂崩れの発生した実際の山を見ながら、議論を交わす自主防災組織のメンバーと村人たち